

# 宗教的価値観と主観的幸福度の国際比較分析

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景と目的

現代社会において、宗教は二面性を持っている。マクロ的に見ると、宗教的価値観の相違は、国家間の対立や紛争、あるいは戦争の引き金となるケースもあり、社会的な分断を生む要因の一つとなっている。

一方で、ミクロ的な観点に目を向けると、信仰が持つ肯定的な側面も無視できない。例えば、「死後の世界（天国）が存在する」と信じることは、現世での困難に立ち向かう動機付けや、人生の指針となり得る。同様に、「神」という超越的な存在を信じることは、個人の精神的支柱となり、日々の生活における心理的な重荷（不安や孤独感）を軽減させる効果があるのではないだろうか。すなわち、信仰心には主観的な幸福感を高める機能が備わっている可能性がある。

そこで本レポートでは、「神の重要度」と「生活満足度（幸福度）」の相関関係を定量的に分析する。宗教が社会的な摩擦の原因となり得る一方で、個人の幸福感に対してはどのような影響を与えているのか、あるいは地域や宗教文化によってその傾向に違いはあるのかを明らかにすることを目的とする。

### 1.2 リサーチ・クエスチョン

「神を重要視する社会ほど、人々は生活に満足しているのか？」

## 2. データと分析手法

### 2.1 使用データ

World Values Survey Wave 7 (2017-2022) を使用。本分析で使用する世界価値観調査

(WVS) について、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター (SSJDA) は以下のように定義している。同調査は、世界中の人々の信念や価値観、動機の変化を理解するために実施されており、経済発展、民主化、宗教、主観的幸福などの多岐にわたるテーマを扱っている。また、WVS は人間の価値観に関する国際的な時系列調査としては最大規模であり、約 40 万人の回答者を含んでいる点も特徴である。極貧国から極富裕国まで、世界の主要な文化圏すべてにおける価値観の変動をカバーする唯一の学術研究として位置づけられている (SSJDA, n.d.)

分析対象国数：62 カ国

## 2.2 変数の定義

### 目的変数：生活満足度 (Life Satisfaction, 1-10)

被説明変数（目的変数）として使用する。質問項目 (Q49) では、「あなたの人生に全体としてどの程度満足していますか」という問いに対し、1（全く不満）から 10（完全に満足）までの 10 段階で回答を得ている。

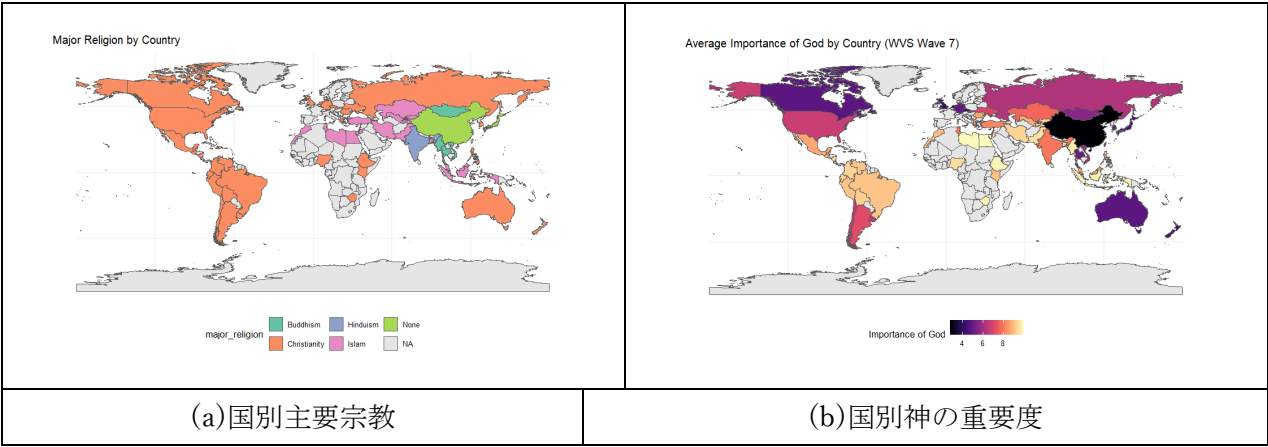
### 説明変数：神の重要度 (Importance of God, 1-10)

説明変数として使用する。質問項目 (Q164) では、「あなたの生活において神はどの程度重要ですか」という問いに対し、1（全く重要でない）から 10（非常に重要）までの 10 段階で測定されている。

### 制御変数：主要宗教 (Major Religion)

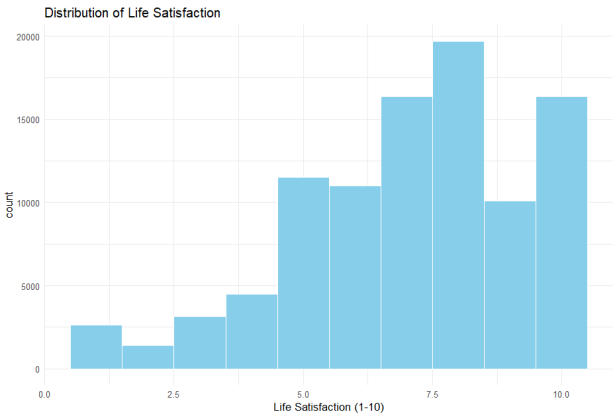
国ごとの文化的背景を制御するために、各国の主要宗教（キリスト教、イスラム教、仏教など）をカテゴリ変数として追加した。これにより、単なる信仰心の強弱だけでなく、宗教文化による幸福度の構造的な違いを比較分析する。

2.3 記述統計



(図 1) 国別主要宗教と神の信仰度

最も対象国が多いキリスト教は国ごとで神の重要度はバラツキがあるように見える一方でイスラム教に割り振られた国はかなり神の重要度が高いことが伺える。更に色の分布から神の重要度は比較的に高い国が多いことも確認できる。



(図 2) 世界全体における生活満足度の分布

図 2 は、分析対象国すべてを含む回答者個人の生活満足度の分布を示したヒストグラムである。分布の形状を確認すると、高得点域に度数が集中している。そのため、1 点から 4 点を選択した回答者は相対的に少ない。このことから、世界全体で見れば、多くの人々が自身の生活に対して比較的肯定的な評価を下している傾向があると言える。

### 3. 分析結果

#### 3.1 2 変数の関係（相関）

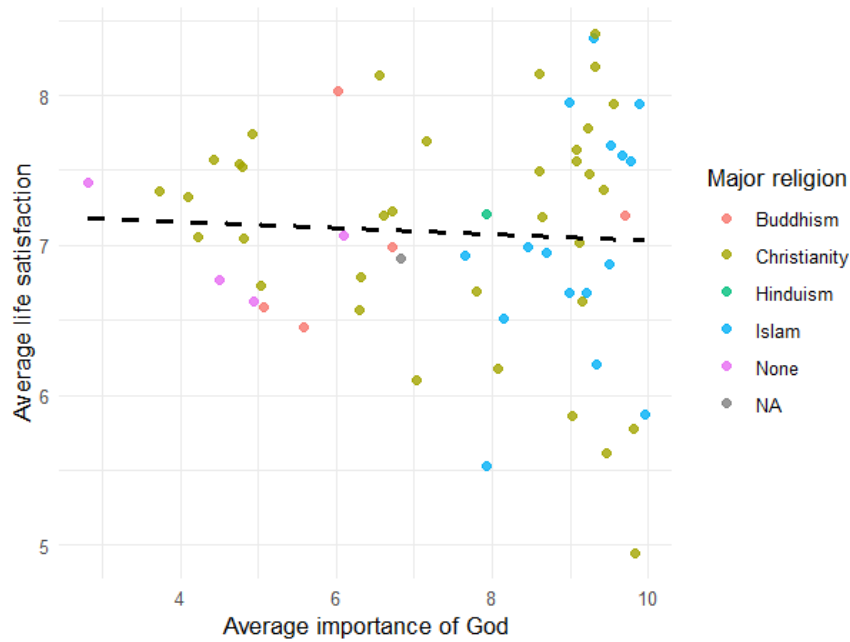


図 3：神の重要度と生活満足度の関係

図 3 は、各国の神の重要度と生活満足度の関係を示した散布図である。点は主要宗教ごとに色分けし、全体の傾向を示す回帰直線を破線で示した。これを見ると、わずかに右下がりの回帰直線が引かれており、神の重要度が高い国ほど生活満足度が低いという負の相関傾向が見て取れる。しかし、回帰直線の周辺には大きくばらついている国々も多く、一律に強い相関があるとは言えない状況も視覚的に確認できる。

3.2 宗教ごとの違い

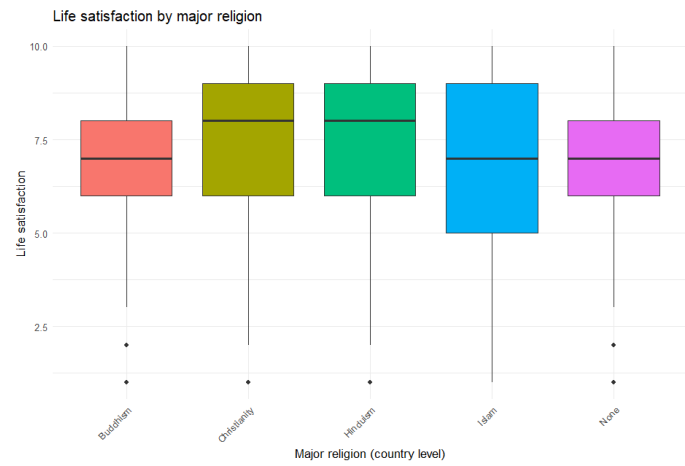


図 4:主要宗教別生活満足度

図 4 は、主要宗教ごとの生活満足度の分布を箱ひげ図で示したものである。特筆すべき点は、各箱の長さ（四分位範囲）とひげの長さである。特に「イスラム教」の箱は上下に大きく広がっており、同じ宗教圏内であっても、生活満足度が極めて高い国から低い国まで幅広く分布していることがわかる。この「宗教グループ内での大きなばらつき」の存在は、生活満足度が宗教という単一のカテゴリだけでは説明しきれない複雑な構造を持っていることを示唆していることが伺える。

3.3 回帰分析

表 1:神の重要度が生活満足度に与える影響

説明変数	係数	標準誤差	t 値	p 値
定数項	7.24234	0.37336	19.398	
神の重要度	-0.02107	0.04756	-0.443	0.659

表 1 は、国別の神の重要度を説明変数、生活満足度を目的変数とした単回帰分析の結果である。分析の結果、神の重要度に係る回帰係数は **-0.021** となり、負の方向（神の重要度が高いほど満足度が下がる方向）を示した。しかし、p 値は **0.659** であり、一般的な有意水準である 5% (0.05) を大きく上回った。また、決定係数も **0.003** と極めて低い値に留まっている。したがって、本分析の対象とした 62 カ国のデータにおいては、神の重要度

と生活満足度の間に統計的に有意な相関関係は確認されなかった。この結果は、先述の箱ひげ図（図 4）で観察された「宗教内での大きな分散」と整合的である。つまり、国ごとの個別事情（経済格差や政情不安など）によるばらつきが大きすぎるため、全体として「神の重要度」と「生活満足度」の間に明確な直線関係を見出すことはできなかったということが伺える。さらに、生活満足度に対する影響要因をより詳細に検討するため、説明変数に「神の重要度」に加え、制御変数として「主要宗教」を投入した重回帰分析を行った。

説明変数	係数	標準誤差	t 値	p 値
定数項	7.25442	0.52524	13.812	
神の重要度	-0.03051	0.05993	-0.509	0.613
キリスト教	0.10100	0.37105	0.272	0.786
ヒンドゥー教	0.19474	0.84661	0.230	0.819
イスラム教	0.04286	0.42054	0.101	0.920
無宗教	-0.14386	0.53046	-0.271	0.788

表 1(b): 神の重要度が生活満足度に与える影響(主要宗教あり)

分析の結果、神の重要度の係数は **-0.031** ( $p=0.613$ ) となり、主要宗教を考慮してもなお、統計的に有意な影響は見られなかった。また、主要宗教の各ダミー変数（キリスト教、イスラム教など）についても、すべての係数において  $p$  値が 0.05 を上回っており、ベースライン（仏教）と比較して有意な差は確認されなかった。このことから、国レベルでの生活満足度の決定要因において、宗教的な属性（信仰の強さや宗派の違い）が持つ説明力は限定的であることが分かる。

### 3.4 モデルの診断

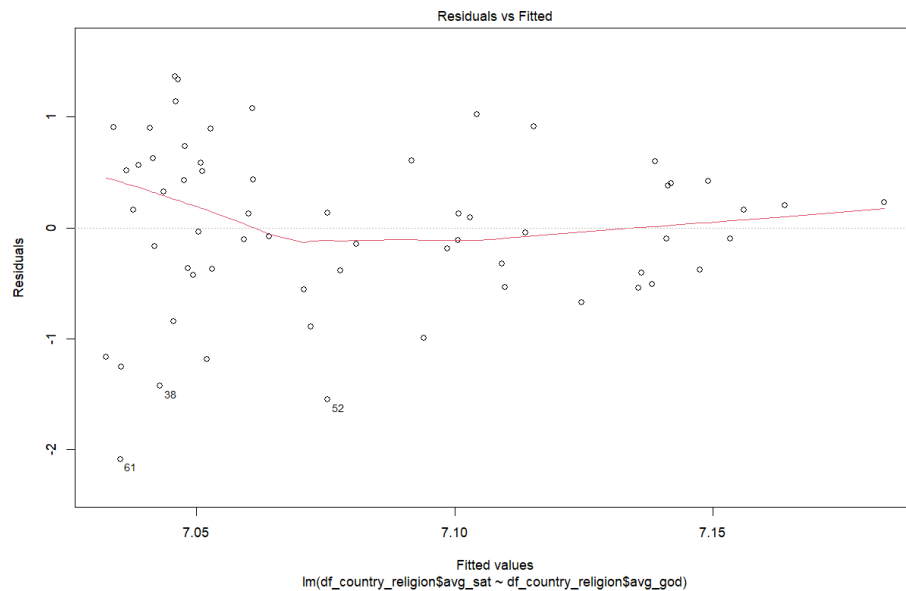


図 5：単回帰モデルの残差プロット

図 5 は、単回帰モデルの残差プロットである。グラフを確認すると、赤い線が完全な水平ではなく、わずかに湾曲していることから、変数間に非線形な関係が潜んでいる可能性が高い。また、一部のデータが予測値から大きく乖離しており、本モデルでは説明できない特異な事情を持つ国（外れ値）が存在することがわかる。全体として残差は 0 を中心に散らばっているものの、これらのパターンの存在は、神の重要度以外の要因（経済指標や政情など）をモデルに組み込む必要性を裏付けている。このモデルの当てはまりの悪さは、国や地域によって「神の重要度」が「生活満足度」に与える影響が異なる（異質性がある）ことを示唆している。そこで、全データを一括りにするのではなく、宗教文化ごとの特性に焦点を当てる必要があると考え、次節では特異な傾向が予想されるイスラム圏に限定した追加分析を行う。

## 4. 考察

### 4.1 全体的な傾向と経済要因の交絡

本分析の全体結果において、神の重要度と生活満足度の間に有意な相関が見られなかった要因として、先行研究で指摘されている「世俗化 (Secularization)」の影響が考えられる。Norris と Inglehart (2004) は、経済的な安全が確保された社会 (先進国) では、宗教的な支えの必要性が低下し、世俗化が進むと論じている。この理論は、本分析の**散布図 (図 3) における宗教ごとの分布**とも整合的である。図 3 を確認すると、神の重要度が低く生活満足度が高い左上のエリアには、世俗化が進んでいると考えられる「無宗教」や、欧米諸国に多い「キリスト教」が多く分布している。対照的に、神の重要度が高い右側のエリアには、発展途上国が多い「イスラム教」などが集中して分布している。この分布状況から、今回観察された無相関 (あるいは弱い負の相関) は、宗教そのものの効果というよりも、各宗教圏の背景にある**経済水準や社会情勢の違いが生活満足度に強く反映された結果**であるということが考察できる。

### 4.2 宗教文化による異質性：イスラム圏の事例

表 2: 神の重要度が生活満足度に与える影響 (イスラム教)

説明変数	係数	標準誤差	t 値	p 値
定数項	3.3662	2.5191	1.336	0.203
神の重要度	0.4032	0.2772	1.455	0.168

本分析の全体結果では、神の重要度と生活満足度の間に有意な相関は見られなかった。しかし、この結果は世界各国の多様な文化的背景が互いに相殺し合ったためである可能性がある。この仮説をより補強するため、イスラム教を主要宗教とする国々 (n=16) に限定して回帰分析を行ったところ、統計的に有意ではなかったが全体傾向とは対照的に係数は正の値を示し、傾向としては**正の相関**にある。Norris と Inglehart (2004) によれば、宗教とは『安心 (reassurance)』を提供するものであるため、生存が不確かな世界では宗教の提供する『安心』への需要は高いものとなる。逆に生存がある程度保証されているような社会では、その需要も低いものとなることが予測される。」(清水 2013)。これはすなわち、厳しい環境下にある人々にとって、信仰が一種の**精神的なセーフティネット**として機能していることを示唆している。本分析で対象としたイスラム圏の多くは、欧米諸国と比較し



て経済的な課題を抱える国が含まれている。こうした環境下では、神への篤い信仰を持つことが、日々の困難に対処するための希望やコミュニティの結束を生み出し、結果として主観的な生活満足度を押し上げていると考えられる。すなわち、全世界一律で宗教が幸福をもたらすわけではなく、社会的な安定度が低い環境においてこそ、信仰が個人の幸福感にプラスの影響を与えるという構造が、本データからも示唆された。

#### 4.3 本研究の限界と今後の課題

本分析には、研究するうえでいくつかの限界があった。第一に、データの代表性と欠損の問題である。WVS の元データから国ごとの平均値を算出する過程で、回答の欠損が多い国や、結合時に国名コードが一致しなかった一部の国が分析から除外されている。これにより、分析結果がデータ整備の進んだ特定の地域に偏っている可能性がある。第二に、交絡因子の制御不足である。4.1 節で考察したように、生活満足度は経済水準（GDP）や社会保障の有無に強く影響を受けると考えられるが、本分析のモデルにはこれらの経済指標が組み込まれていない。そのため、真の因果関係を特定するためには、経済データを制御変数として加えた重回帰分析が必要だった可能性が高い。

### 5. 結論

本レポートでは、世界価値観調査（WVS）のデータを用い、「神の重要度」が各国の「生活満足度」に与える影響について分析を行った。

全 62 カ国を対象とした回帰分析の結果、全体としては神の重要度と生活満足度の間に統計的に有意な相関関係は見られなかった。また、箱ひげ図や残差プロットの確認から、同じ宗教圏内であっても国ごとのばらつきが極めて大きく、単一の回帰直線では説明が困難であることが明らかになった。一方で、イスラム教を主要宗教とする国々に限定したサブグループ解析においては、神の重要度が高いほど生活満足度が高まるという正の相関傾向が確認された。以上の結果から、宗教と幸福度の関係は世界共通の単純な直線関係ではなく、各国の社会経済的な文脈によって機能が異なることが考察できる。特に、経済的・社会的に困難な環境においては、宗教が精神的なセーフティネットとして機能し、人々の主観的な幸福感を支える重要な役割を果たしている可能性があることが先行研究（Norris & Inglehart, 2004）の議論とも整合的である。

## 6.参考文献

- 東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター (SSJDA).  
「WVS (World Values Survey) 概要」. SSJDA Direct. <https://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/Direct/gaiyo.php?lang=jpn&eid=1458>, (参照 2025-02-XX).
- 清水香基 (2013). 「世俗化の研究——P. Norris & R. Inglehart の "Sacred and Secular" (2004) に関する研究ノート」 『青山総合文化政策学』 第 5 巻第 2 号 (通巻第 7 号), pp. 47-71. Available at:  
[https://opac.agulin.aoyama.ac.jp/iwjs0011opc/catdbl.do?pkey=TF01306885&hidden\\_return\\_link=true&startpos=-1](https://opac.agulin.aoyama.ac.jp/iwjs0011opc/catdbl.do?pkey=TF01306885&hidden_return_link=true&startpos=-1)